

東大見学会企業大学訪問感想文

1 ディレクトフォース

(1) 三菱商事の方の説明

三菱商事は総合商社であり、材料から製品をつくり、その商品を売るまでの一連の流れ全てを行っている。90か国以上で、626社と連携・直轄しており、連携・直轄している企業全ての社員は68383人、三菱商事だけで5400人にもものぼる。6次産業に力を入れており、特に福島県産ぶどう・ももの栽培、ワインの製造、販売は特筆すべき内容である。海外との連携が大切なので、英語を話せることが大切であり、高校生のうちに、英語力を身に付けることが必要である。当然であるが就職してからでは大変苦労する。また、学歴が全てではなく、就職する時は、文化部よりも運動部の方を重視するらしい。部活での上下関係、言葉遣い、生活習慣、これが運動部の方が優れており、社内の人材として適切であると考えている。文系・理系の採用の割合はほぼ半数ずつとなっている。部下に求める能力は、多様性を認める広い心を持つこと。相手を傷つけないこと。失敗した時に矛先を向けるとしたら、まず自分から。様々な国の人と連携していることから、日本の言語・文化・宗教・習慣と、外国のそれらは、どちらが正しいというわけではなく、どちらも認め合うことが大切である。

そして、働くうえで大切なのは『スマイル』である。

私たちに望むことは、学生時代に自分の強みを育むこと。基礎体力をつけること。よい友達、よい先輩を見つけること。高校時代の友達や先輩が一生の宝物となることが多い。

(2) 感想

私は、三菱商事を訪問させていただき、深い感銘を受けた。英語力は、とても大切だと実感した。これまで「日本人なのに英語は使うのか？」と思っていたが、決してそんなことはなく、むしろ必要不可欠であり、普段の高校の授業にも今まで以上に真剣に取り組まなければならないと感じた。また、日本人は、宗教に無関心な人が多い。世界には様々な種類の宗教が存在し、多様な考え方があり。国際化が進展するこれからの時代は、英語だけでなく、他国の宗教や文化を学び、互いに認め合う関係をつくりあげていくことも大切であると思った。

2 企業訪問 (LION)

(1) LIONの方の説明

会社名であるLIONの名称の由来は、一番初めに商品化されたのは歯磨き粉だったので、ライオンは牙も丈夫で、歯磨き粉の商標としてはうってつけであったからである。

LIONの企業概要に関しては、昨年度の売上高3674億円、営業利益124億円、従業員数6343名、売上高の61%が一般消費財、13%が産業用品、19%が海外での売り上げであり、一般消費財のうち、20%がオーラルケア、30%がファブリックケア、14%が薬品事業等となっている。1年間で一家庭で平均19個のLIONの商品が、消費されている。

LIONが取り組んでいる研究に関しては、人々の生活の向上に寄与する新製品の開発を目標としている。人々の生活上の悩みや課題は、常に新しく、これまでに経験したことのないものなので、これまでの経験・知識を最大限活用し、かつ、新しい技術への取り組みもしなければならない。また、新製品の開発

に当たっては、ライバル会社も同じようなことを考えていることが多いので、スピードが大切である。大学の研究はサイエンスの追究、原理・現象・メカニズムの解明が目的となっているが、企業の研究は社会の役に立たせるため、製品という形にすることが目的である。併せて、機能・有効成分・安全性・メカニズムの解明も行う。

高校や大学時代に専門性という武器を身に付けることによって、将来、いろいろな人と対等に議論できるようになり、一目置かれる存在になれる。また、海外との研究機関とも連携して研究を行っているので、英語を身に付けておいて損はない。

(2) 感想

「研究を進めていき、諦めるという経験はありますか」と質問したならば、「あります。10回取り組んだならば、ものになるのは1回か2回、よくて3回です」という返答であった。このことから企業の研究というのは、かなりシビアな世界なのだと感じた。その中で、日々研究に取り組んでいる社員のひたむきな努力に感銘を受けた。また、説明していただいた研究員の方は、研究という仕事が好きで、全く苦に感じないと言っており、私も将来、自分の好きな仕事に就けるようになりたいと思った。そのための努力を今のうちから行っていきたいと感じた。

3 東京大学見学会

(1) 見学会の内容

ラボツアーCに参加し、最も印象に残っているのは、「新しい機能をもった磁石の世界」の見学である。ここでは、気温によって磁力を持つようになるような物質の研究やブルーレイディスクよりも安価で、高性能な物の開発等を行っていた。

「加速器で迫る素粒子と宇宙～ヒッグス粒子を発見した世界最大の加速器が再び稼働～」で印象的だったのは、ヒッグス粒子を発見するための加速器の開発である。この加速器は直径が約9kmもあり、その加速器の中に陽子を回して衝突させることで、背後にある物理法則を探るというプロジェクトが行われている。

ラボツアーDでは、「ナノサイズ化した金属が示す新しい化学反応」の見学をした。そこで、金属を最大限分解すると原子になるが、原子が複数個結合している物を研究していた。そこでは、まさに全てゼロからの実験を行っていた。具体的には、金(Au)は目に見えるような物でも、原子でも化学反応は起きないが、原子が複数個結合している場合は、化学反応が起きる。そのような実験をする時に、薬品だけでなく、実験方法や実験に使う機械や器具も自分でつくっていた。

(2) 感想

東京大学のキャンパスの広さに驚いた。都会のど真ん中にあるのにもかかわらず、大きな樹木がたくさんあり、自然に囲まれて勉強できる環境にあった。仙台二高の環境にどことなく似ている印象を受けた。学生の多くは、とても落ち着いていて、上品な雰囲気があった。

理学部においては、二高の教室の3分の2程の面積のラボでの発見が世界的な発見につながるようなことがあるようだ。さらにアメリカの有名な科学雑誌にも取り上げられるほどの研究が行われていることに驚嘆した。まさに、東京大学は名実ともに日本最高峰の大学であることを実感した。

ラボツアーDでの実験は、自分の探究心をくすぐられ、理学の道に進みたいという思いが高まるきっかけとなった。全てゼロからつくり出す実験は、今まで自分が行ってきた先生方から与えられて行う実験とは、

根本的に異なるものであった。まさに衝撃的とは、このようなことを言うのではないだろうか。全ての大学でそのようなことができるかどうかは分からないが、東京大学、そして、東大生のレベルの高さを目の当たりにした。学問の奥深さ、楽しさ、苦しさ、その全てがこの実験に凝縮されているように思った。自分もそのような場で学問に携わっていきたいと感じた。

4 最後に

今回の東大見学会企業大学訪問では、大変貴重な体験をさせていただいた。また、そこから多くのことも学ぶことができた。今後の自分自身の進路選択の一助となり、将来、どのような職業に就きたいかということのヒントを得ることができた。このような機会を私たちに与えてくださった仙台二高の先生方、仙台二高OB・OGの方々、三菱商事の方々、LIONの方々、東京大学の方々に深く感謝したい。本当にありがとうございました。